

《2006年10月例会報告》

【日時】2006年10月6日（金）19:00～21:00（→その後「ルン」～1:00）

【会場】筑波大学附属高校体育館及びミーティングルーム

【テーマ】聴覚障害を持つサッカーファミリーからの言葉

—聴覚障がい者を取り巻くサッカー環境と彼等を知る—

【話題提供者】赤沢宏・植松隼人（東日本ろう者サッカー協会役員）

【コーディネーター】中村敬

【参加者（会員）】浅野智嗣（エル・ゴラッソ） 麻生征宏（学習研究社） 岸卓巨（DUOリーグボランティア） 中塚義実（筑波大学附属高校） 中村敬（緑VSC：墨田区） 野田直広（富士電機）

【参加者（未会員）】杉山誠昭（学習研究社） ★赤沢宏・植松隼人（東日本ろう者サッカー協会） ★内田匡輔（東海大学） ★漆原啓介（W・HEAT：聴覚障がい者サッカーチーム） ★曾根靖裕（DE太猿／東京都聴覚障がい者体育部サッカー部） ★中村孝子（八王子市在住／家族全員サッカーファン） ★橋谷将（エンジョイ） ★藤田直樹（ビバ！サッカー研究会） ★森貞礼司（富士電機） ★渡辺友和（南房総の介護員／サッカー好き）

★は初回参加のため、参加費は免除

【報告書作成者】中村敬

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

聴覚障害を持つサッカーファミリーからの言葉

—聴覚障がい者を取り巻くサッカー環境と彼等を知る—

赤沢宏・植松隼人（東日本ろう者サッカー協会役員）

I. 第1部：実技編

「体験&交流 耳栓フットサル（※ろう者6人 健聴者混合）」 報告

※ろう（聾）とは様々ある聴覚障害の一区分であり、一般的に聴覚障害の比較的重い人を「ろう」、軽い人を「難聴」と呼びます。対して聴覚に障害がない人を「健聴者」と呼びます。「ろう」と「難聴」の明確な分け方は難しく、ここでは今回参加された聴覚障害を持つ方たちを、その分けに関わらず「ろう者」と表記させていただくことありますが、ご了承ください。

体育館編では、彼等を上記のような言葉や区分ではなく、まず接してみて、彼等自身を感じてほしいため、全員の自己紹介等はせずに、いきなりミニゲームに入りました。

目的としては、できる限り彼等の聴覚・発語・発音機能に近い状態の中で一緒にプレイし、彼等自身

と音のない世界、またはそこでのサッカーを知ってもらおうということでした。
以下、中村が体験しての感想も入れつつ報告します。

テーマは「コミュニケーション」

ルール：健聴者は耳栓をして、声を出さないでプレイする

試合スタート・終了の合図等は、ホイッスルではなく、すべてフラッグにより合図

1) ろう者6人と健聴者混合で、4対4のミニゲーム (5分×2本)

休憩時には各チームで作戦タイムを設けた。また発表者より、ろうサッカーの試合中のコミュニケーションのとり方を、パスの受け渡しを例に出し実演。そこでは、身振り手振りでの、パスを受ける位置の明確な示し方と、正確なパスの受け渡しが印象的だった。

また、参加者からの質問で、

Q. 交代の時はどうするんですか? に対し、

A. 植松氏 大きく手を振ったり、顔を合わせるよう目線や体全体で合図を送ったりするとユーモアを含んで実演、和やかな雰囲気の中で進行した。

2) チーム赤沢 (ろう者チーム) 対 サロン2002代表 (ルールは同じ、耳栓+声だし禁止)

5対5の交流特別ゲーム。交代自由 (10分×1本)

楽しみにしていたスペシャルマッチ。結果はどうなるかと思ったが、15名弱という層の厚さでものを言わせたか、ホーム (筑附) という地の利からか、サロンチームの勝利でした!

(中村感想) 少しだけ説明をした後に、すぐに皆に耳栓をしてもらい、ほとんど音のない世界に入った。誰もがそうだと思うが、耳栓はした経験はあっても、耳栓をしたまま、個人的にはなく、集団的に活動した経験がないため、それだけと思うかもしれないが思った以上に新鮮で、それに運動が加わると刺激的な状態であった。しかも声を出してはいけないというルールなので、それぞれが自分なりのボディランゲージでいつも以上にコミュニケーションをとろうという姿勢が自然に出ていた気がする。一つのハイタッチも、早く意思疎通したいという感情から、いつもよりその意味は大きかったように思う。またゲーム中「頭を働かせなきゃ」という意識が自然にでてきた。

走り始めると予想以上に自分の「ハァーハァー」という荒い呼吸音が、耳に体に伝わったことが印象的で、それが「ゼーゼー」に変わって行き、頭を働かせられなくなってきた時分にその難しさを実感した。

コンビネーションの部分では、攻撃の際は、例えば「ワンツーツ」と叫びたいけど、そこで声でコミュニケーション取れない歯がゆさを感じる程度だったが、ディフェンス時になると仲間を使ってボールを奪うことが声がないと難しく、いつもより走ってそれをカバーしようと思った。自分がDF出身ということもあるかもしれないが、守備においての統率の仕方などの多くのハンデがありそうだなと思った。

と今書いていて、夢以外で自分は大観衆の前でプレイしたことはないが、Jリーガーなどはフィールドで実際どの程度声が聞こえているものなのだろうかと思ってしまう。

(そちらも味わってみたい)

II. 第2部：ミーティングルーム編

1. それぞれのサッカー環境から現状を垣間見る

—植松氏のことばから—

自分は一般の学校に入って育ってきまして、高校2年生のときにサッカーと全く関係の無いろう者イ

ベントに行きました。これは自分が出たくて出たのではなく、私の母に参加してみたらと言われ、ろう者に会ってもしようがないと思っていました。でも、そこにいる2人の友達と出会い、それからろう者だけのサッカーがあるというのも知りました。それまで自分は、小学校5年から一般のサッカーをやっ
ていき、大学でも普通にやっていたのですけれども、ろう者サッカーでも是非一緒にプレイしたいという
ことでそちらにも入りました。

そこで一番びっくりしたのは、みんな同じろう者なのに、補聴器を外してプレイしていること。今ま
で自分は補聴器をつけてプレイするのが当たり前だったからです。外した状態で自分もプレイしたら、
やはり全く聞こえないし、状況判断しにくいというのを感じました。

ろう者サッカーをやり始めてから5年経つが、大学2年のときに正式に東日本サッカー協会の下にあ
る東京都聴覚障害者連盟サッカー部に入団しました。1年目はマネージャーとして様子を見たいという
のもあったので、2年目から出場したという経歴になります。1年間の流れとしては、東日本デフリーグ、
それから関東大会、全国大会と主に大きな大会はこの3つです。

やはり印象的なのは、補聴器を取ってプレイしたら視野が狭くなったこと。そのときはボールを奪わ
れてばかりで、自分のプレイが出来ない感じがして、力を出したいのに出せないというのが悔しかった
です。ろう者サッカーをなめていたというのも実際ありましたし、大きな大会に出るごとに、すばらし
い選手がいることも知りました。ブラジルにサッカー留学した人も何人かいますし、帰ってきて活躍し
ている人もいます。

5年経って、自分は全く手話が使えなかったのに使えるようになりました。試合中ちょっとしたコミ
ュニケーションは指文字・手話を使いますが、その大事さも感じました。手話を覚えるのは、マニユ
アル本を見て覚えるよりも、実際、ろうの友達と会って、見て覚えてきました。試合中のジェスチャーと
かも、昔は少なかったが身につけてきました。声を出すことも気持ちの現われとして大事だし、ボール
が欲しいんだということをオーバーリアクションする大事さも改めて知りました。そして、後ろから相
手が来そうだなという気配(イメージを持つこと)や、首を振って周りを見ること等が身につきました。
そういうことでプレイにも、今の方が余裕があるという違いを実感しています。自分は健聴と一緒の世
界(社会)からろうの世界(社会)へ慣れるまで時間がかかりましたが。

今日は前半のフットサルでろう者のサッカーを少しでも感じ取れたのではないかと思います。その感
じ取れたところで、実際に見ると「なるほど」と改めて発見もあると思います。今後も大会がいっぱい
ありますので、聴覚障がい者のサッカーを是非一度見に来ていただけたらうれしく思います。

—赤沢氏のことばから—

王子障害者スポーツセンターというところがありまして、そこにはいろんなスポーツのサークルがあ
り、その一つに聴覚障がい者サッカークラブがあって、その中の自分の先輩に誘われたことがサッカー
を始めたきっかけです。

はじめはもちろん何も知らなくて、ただ単にゴールに入ればよいのだなあと思ってやっていました。
小学校5年くらいから本当に好きになり、のめりこみました。自分の入った王子ウィングスというのは
聴覚障がい児少年サッカーチームでして、現在は人数が減ってしまい、活動していません。なぜ活動し
なくなったのかは、少子化になって若い世代交代への引継ぎが出来なくなってしまったからです。若い
世代はサッカーに興味がないのかは分かりませんが、サッカーよりも野球のほうが身近であり、歴史的
にも長いからだと思います。

前にろうのフットサル大会がありました。そこに出場しようとしたチームは、自分のチームメイトが
フットサルをやりたいといって人数を集めたのですが、結局当日集まったのは3人でした。試合も出ら
れないし残念でした。結局そのチームもなくなったと聞いています。

サッカーと出会って18年ですが、クラブではDFをやっていて、オフサイドトラップやリーダーとして
の指示が難しいなと思っています、それは声では聞こえないから身振り手振りアイコンタクトが重要

です。練習を重ねてようやく指示も出来るようになった。だから長くやらないとDFは難しいなあとも思っています。

私は監督も現在引き受けていますが、そこでは常に周りを良く見ることとコミュニケーション（声と手話、ジェスチャー、アイコンタクト）というテーマを選手に投げかけています。それが出来ないと視野が狭まりいいプレイが出来ないと言っています。

前にロングボールを使ったプレイを教えました。ロングボールは難しく、ある程度の個人としての経験と、同じチームにおいての経験がないと難しいように思います。なぜかという、どんなボールを要求しているのか、どのように攻めていくのか、そこに一瞬ではあるけれども意思疎通の早さが求められるからです。連携プレイの部分は練習時間が少ないと難しい。

今私は、サッカー選手というよりも指導者になりたいです。実際ろうの指導者も少ない状況です。前に1回指導者講習会を受けましたが、当然といえば当然ですが、当日のプログラムや講習メニューは健聴の方たちのマニュアルなので、なかなかそれを持って帰って練習に活かすという対応が出来ません。出来ないというかそのメニューも使いにくい。やはりろう者独特の指導ポイントもあるし、健聴者と同じどおりということにはいきません。

2. 耳栓・声なしフットサルをやった感想・ディスカッション（以下敬称略）

中塚 途中でパスの受け方のアドバイスをしてくれたが、僕等が高校生に指導しているのと同じでした。右足にパスが欲しいっていうときは手で合図する、それに加えて僕等は言葉で言えるけど、言葉で言えない分だけもっと分かりやすく見せているのだということがわかり、共通するものがあると思いました。

中村 ワンツーパスのとき、思わず声を出してしまいそうになったが、それができないとなると、目だけでそれを伝えるのは難しいなと感じました。

渡辺 ゲーム中、ろうの人たちは、ボールを奪うとき背後から来ると分からないからか、私は全部後ろからとるようにしていました。聞こえないということを利用したことになるかもしれませんが、聞こえない障害があるからバックチャージをしてはいけないみたいに気を使うのも変だし、それは実際どうなのかな、どのように対応するかなと見ていました。現実に健聴者のサッカーでも後ろからのチャージはないということになっていますけど、実際はあるし、非常に危険性が高いので、どうでしょうか。

中村 怖いですねえ

赤沢 言葉で説明しづらいのですが、僕達の場合、ドリブルしてるときはいつでも、体当てられても大丈夫なように、それに対し意識しています。重心を低くして、当てられても倒れないようにするとか。

内田 たぶん渡辺さんが質問したいのは、一つは、後ろからチャージされてボールを奪われるということがあるのかないのか。またそのときどう感じるのかということではないでしょうか。

もう一つ僕が質問したいのは、デフリンピック（聴覚障がい者のオリンピックにあたるもの）についてです。デフリンピックでは補聴器は使っては駄目ですよ。ではフットサルではどうなのか。サッカーは使用禁止ですよ。禁止な場合、ファール、普通審判がホイッスルを吹きますが、それをどういう風に分かりたりするのかとか、あとリスタートの時も、お互いどのように分かり合ったりするのかあという質問です。私は聴覚障がい者ラグビーに関わってまして、横からや後ろからのファールが多いですし、審判が笛を吹くことも多いので。

赤沢 サッカーの場合ですが、副審は2人いますけど、主審もフラッグを持っていて、その他にゴール裏の横にも外野審判補佐がいて、何かの際は主審・副審に合わせて一緒に旗を振ります。そうすることによって気づきます。リスタートの笛の合図は、分かりやすい主審の手の合図や、副審が旗で合図する場合もあります。

植松 バックチャージについては、赤沢と似たような答えになってしまうけれど、まず常に聞こえないというリスクを意識して、常に周りを見ることを意識しています。来るというのを当たり前で思っておく。その意識が聴覚障がい者は強い。

それでも分からないで後ろから来る時はある。それはスピードのある（アグレッシブな）現代サッカーとして捉えている。

もちろん明らかにひどいチャージはレッドカードが出るし、健聴も聴覚障がい者も関係ない。（後ろからのチャージのような）危険なファールはやってはいけないということをみんな分かった上でプレイしていると思う。

顔を振るだけでなく、手を広げて触れるようにするとか、相手が来ることをイメージしてプレイしています。DFもFWも同じで、その意識はみんな強いと思います。

浅野 サッカーのスキルの部分で聞きたいのですが、植松さんは健常の人たちとサッカーをされてきて、その後に補聴器を外してろう者のサッカーをされてから視野が広がったとおっしゃいました。それはなぜ？

植松 言い方としてはおかしかったかもしれないが、一般の方も補聴器をつけていた自分も、視野を確保しているかもしれないが、どこかでどうしても耳に頼っているところもある。だから「顔を一生懸命振って見なくてもできる」とどこかで思ってしまう。それは人によってまちまちではありますが、そういう自分はいた。補聴器を外したら、全く聞こえないので（必死に）見なきゃ！という自分が芽生えてきました。自分の場合は、ですけど。

浅野 もっと努力します（皆笑）

植松 努力は要らないですよ～ずっと耳栓してもいいですよ。自然になりますよ（皆笑）

岸 ろう者のサッカーやって得たことを、一般のサッカーで活かしていますか？

植松 そうですね。たまに一般のサッカーで補聴器を使わないでやってみようという自分もいました。もとの（耳に頼ってしまう）プレイに戻ってしまうのかという不安もあったし。でも一般の方はもちろん声も使うし、「聞こえてないのかよ」って言われそうだけど、言われようが関係ないし、補聴器使ったことも忘れちゃえばいいのですよ。

今は補聴器をつけてもつけなくても、周りをぱっと見て反応することが身についたと強く感じています。

麻生 私の出身地の北海道には北海道高等聾学校があって、30年位前は普通の高校も合わせて、道内全部で1番強いという時期がありました。それから考えると、全国で、ろうの人たちと健聴の人たちが本当に別にやらなければいけないのかが疑問としてあります。

今日のフットサルも、遊びではあるけれども一緒にやってぜんぜん困らなかった様に思います。なので、もっと一緒にやれるのではと思います。ろうの方たちの方が、自分達から別でやろうとしているのではないのかなとも思います。こちらから一緒にやりましょうと声に出さなければいけないところもありますが、そんなに難しく考えなくても、もっと混ぜてみんなで作るのではないのでしょうか。

そういう風に捉えて（その上で）ろうのサッカーもみんなに知ってもらおうという考え、実践はできないのかなあと思うのですが、どう考えますか。

植松 はい、全くそのとおりです。

今もその北海道のろうのチームはあって、今でも強いのですが、昔は本当に強くてろうの世界では歴史的に有名でした。自分もろうサッカーと出会ってから聞いてびっくりしました。

ここにいる友達3人も石神井聾学校出身で、サッカー部の立ち上げのメンバーなのですが、彼等は公式試合ではないのですが、一般の高校にも練習試合を申し込んで試合をするような活動は積極的にしていました。

私も現在東京都議会リーグに所属しているチームでは一般の方たちと試合をしています。見えな

いところでは活躍・活動しています。それには一般の方たちにはぜひ聴覚障がい者のサッカーチームがあるということも知ってもらいたいという意味もあります。

それとか、茨城波崎の一般の大会にも顔を出したりもします。いろんなところで活動していることはしています。

中塚 日本サッカー協会とはどういう関係になっていますか？

JFAではサッカーファミリーを増やそうということを言っているのですが、皆さんもサッカーファミリーじゃないですか。

植松 サッカーファミリーですよ。

中塚 それが組織の上でどうなっているのかな。ということなのですが。

内田 ラグビーは始まっていますよ。ホームページに載っていますので見てみていただけたらと

植松 JFAと日本ろう者サッカー協会のパイプはまだまだこれからという現状でして、でも現在の日本ろう者サッカー協会の高橋会長がJFA関係者と話はしているみたいです。その中身の話はまだ伝わっていませんが、日本ろう者サッカー協会のHPがありますので、ぜひご覧になってください。

中村 自分も組織について疑問を前から思っていて、昔に知的障がい者スポーツ組織、スペシャルオリンピックス東京のサッカーの手伝いもしていたのですが、ちょうどその当時、障害者スポーツ指導員の資格をとりに行き、障がい者スポーツの歴史等の講義内容の中でも一切その団体や活動について触れられていなくて、組織がつながっていなかったとしてもすごく疑問でした。

それから、麻生さんがおっしゃられた「障がい者健聴者分けなくても一緒に出来るのでは」というところですが、自分は聴覚障がい者の場合は特に、サッカーをやる場合機能的には（聞こえないというハンデはありますが）問題ないと思っていますが、それよりも障がい者個人が学校等という環境に入ったかという方が問題だと思っています。最初に入った環境によって健常者と交わらない時間を長く過ごすことになったりするケースが良くある。（健常者側としても障がい者と全く交わらない環境に入ってしまうこともあるが）自分は重症心身障害者施設で働いたこともありますが、学童期は養護学校に通い、卒業するとすぐに施設に入り、全く一般の社会に接しないで過ごしていくというケースが多くありました。それはしゃべるとか理解するという能力はあるのにです。そのような環境が大きな問題だと捉えています。

今回このような企画をしましたが、自分は彼等からすごく学ぶことがありまして、是非うちの少年サッカークラブにも来て欲しいとお願いしています。というのはサッカーをというのがありますが、それよりも彼等のジェスチャー・手話を交えた表現力だったり、まず相手をしっかり見てくれるところだったり、手話はまず相手を見なければならぬけれど、今の子ども達は話しているとき下を向く子が多いのでそういったところでも、是非会って感じてもらいたいなと思っています。それで今回やそういうような機会を増やすことによって、環境や、組織等を下から変えていければなと思っています。

本日はありがとうございました。

Ⅲ. 報告書作成者・参加者より感想

■報告書作成者（中村敬）より

この日の参加者の中には初めてろうの方と接しられる方がいたと思うが、その方たちは耳栓サッカーも刺激的だったと思うが、それと同じくらい文章ではなかなか伝えづらいが、はじめて見る彼らの手話や表現方法を見て、体全体というより彼等自身から出ている表現力あるいはエネルギーみたいなものを感じ取れたのではないかと思う。

自分もこれまで何人かのろうの方と接してきたが、もちろんいろんなパーソナリティを持った方がいることは承知だが、共通して明らかに自分達にはない魅力的なものを感じるのは気のせいだろうか？と今

回も改めて思ってしまった。

またこの報告書はまとめたというよりも、綴ったという感じではあるが、事前準備（打合せ）やこのテープ起こしを担当して、お互いの言葉遣いや慎重なやり取りに気を使いすぎて、かえって真意が曇ってしまいそうな場面がいくつかあった。お互いの間にある機能的な障害以上にそれが確認できたことも、自分としては興味深かったと感じている。それがどこから来るのかというところもまた考えてしまうのでやめるが、また今回のような企画をどこかで出来たらいいなと個人的に思った次第です。

最後に自分に力不足もあり、当日のことをこの報告書で伝え切れていないというのは否めないが、今回の例会は文章で伝わるものよりも、本当に（サロンのロゴではないが）face to faceの興味深さがあった。お互い聞き取れないことばもあったし、理解にタイムラグもあった。それらによって発表内容も予定より小さくなってしまった。が、同じサッカーファミリーの情熱は伝わったし、何より一緒にサッカーをやった楽しかった。

赤沢・植松両氏を始めご協力いただいた方に感謝しております。

■参加者（渡辺友和）より

まとめていうと、楽しかったです。障害とか言葉とか初対面とか、そんなのはボールひとつで越えられるものと確信できました。また、「障害」というのは、必ずしもマイナス的なものではなく、それを通して改めて自分のプレイを見直すこともできるし、ひいては自分の「世界」についても見直すことができるということを再認識できました。（そういえばガリンシャも障がい者でしたね）

サッカーを思い出させてくれてアリガトウ！また、みんなでサッカーやりましょう！！

IV. サッカー新聞「エルゴラッソ」に当日の様子が載りました

(2006. 10. 9. 記事転載)

■聴覚障害サッカーを体験して／浅野智嗣

障害者サッカーというとネガティブなイメージを思い浮かべる人が多いだろうが、聴覚障害はむしろ活発だ。さまざまなサッカーを体験してきた浅野智嗣が、筑波大付高アリーナで聴覚障害サッカーに触れた。

サッカーでよく言われる言葉、「後ろの声は神の声」の神の声がまったくないことに僕は戸惑った。サッカー・スポーツを文化として日本に根付かせたいと考える人たちのゆるやかなネットワーク「サロン2002」が開催した聴覚障害サッカーを体験した印象である。体験は耳栓をしてルールは声を発さないこと、その他は普通のサッカーと何も変わらない。が、その困難さは予想以上だった。ボールホルダーの前に自分が位置している時は、ジェスチャーで右によこせ、とか指示はできるのだが、後ろに位置した時に何の指示もできない、したがってボールホルダーの視界の範囲に「顔を出す」ことをしないとゲームに参加できない事態となる。おのずと運動量は増える。一方自身がボールホルダーの際には、声の指示が期待できない分通常以上に広い視野確保の意識を持たないとすぐにボールを奪われてしまう。この難易度の高いサッカーをろう者のプレーヤーは当たり前のようにプレーするのだ。

以前は補聴器をつけての健常者プレーヤー、現在は補聴器を外してろう者サッカーをプレーする植松隼人君（25）は、「ろう者サッカーをプレーすることで、以前よりも首をふることを意識し、広い視野を確保することができるようになった。以前は味方の声に甘えてしまい、視野確保の意識が薄かった。」と語る。

また同じくろう者プレーヤーであり、東日本ろう者サッカー協会役員でもある赤沢宏君（25）はジェスチャーの大切さをわかりやすく語る。「ボールホルダーの視野範囲だとしても、健常者には声での指示があるが、僕らにはない。だからこそ誰でもわかるボディコミュニケーションが大切なのです。」と。

世界には様々なサッカーがある。僕はそのサッカーの多様さ、奥深さを体験する目的でこの場に参加した。が、ここにあったサッカーは「視野確保」、「コミュニケーション」という JFA サッカー指導教本に掲載されている基本中の基本であり、いわばサッカーというスポーツの原点の再発見であった。

以上